

「子どもの発達と感情」における学びと「自己の体験」の実践的つながり

大学院（教育実践高度化専攻）・橋本 巖

1. 本授業の位置づけと目的および授業研究・評価の視点

本授業は、教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)の「専攻共通基礎科目(生徒指導及び教育相談に関する領域)」に位置づけられた前期開講の選択科目(2単位)であり、橋本が単独で担当している。2019年度の履修登録学生数は12名(教育実践開発コース所属の非現職教員院生1年次10名、2年次2名)であった(前年度は5名)。

本授業の目的は、「子どもの情緒発達・社会性の発達心理について生涯発達の視点から学ぶとともに、これらの側面に影響する社会的関係(家族、仲間、教師)や、社会的自立、自己概念・アイデンティティの形成などとの関わりをとりあげ、学校における課題と教育実践・支援について考える」ことである(後出の授業構成を参照)。到達目標は、上記内容に関する心理学諸領域の知見を学ぶことを志向しているが、その方途として、「子どもや青年の生活文脈の中で感情をできるだけ具体的に考え、各自の経験を対話的に共有することを通して情緒発達についての理解を深める」ことも重視している。特に到達目標の後者の側面は、理論的概念の学びと、体験的な記憶の想起の往復・関連づけという「自己との対話」、並びに教材に登場する他者や一般的他者、他の受講者などの「他者との対話」の双方から学び、自己省察して深く理解することを目指している。それは、現実と結びつけながら知識を吟味したり、学術的な知見・実践例に照らして自己の認識・感じ方を振り返る機会にもなるであろう。この点を本年も継続して検討するため、「自己の体験したことと学習内容とのつながりの意識」に特に注目する。

ところで、教職大学院では、地域社会の学校における実践と大学院での学習内容とのつながりを大学院生自身がどう認識するかが重要であり、それは、FDとしての授業評価報告で求められている「地域社会を核とした教育

と研究のつながり」の検討にほかならない。本授業が目指した「自己の体験したことと学習内容とのつながりの意識」の分析は、「教職大学院生が捉えた実践性と感情発達に関する知識との体験的なつながり」の検討に貢献すると考えた(「自己の体験」の多面性と「教職実践経験」との関わりについての議論は、2018年度報告書を参照)。

2. 授業構成と授業の工夫

(1)授業構成 15回の授業内容系列は、以下に示す<2019年度の実際の授業構成>のとおりである。下線を付したテーマは、授業冒頭の関心度調査に基づいて、関心のある受講者が発表役割を選択した授業回であり、受講者が50分程度、「授業者」的な役割で発表を行う。受講者が選択しなかったテーマも除外はされず、配置をある程度移動させて筆者が講義・演習を行った。

<2019年度の15回の実際の授業構成>

- 1 ~3 導入・進行方法の説明および本授業概要に基づく関心度調査／発表者の決定／理論的な講義：情緒・社会性の発達、感情コンピテンス等と発達課題(学校教育のかかわり：道徳との関わりを例に)
- 4 乳幼児の生得的能力、愛着と前言語発達
- 5 愛着の生涯発達と、児童虐待
- 6 幼児期の反抗期、自己制御、自己意識的感情
- 7 遊びを通してみる想像力、興味・動機づけの発達
- 8 学校への移行：児童・青年の認知発達と自覚的学び(メタ認知に関するワーク)
- 9 体験活動からの学びと意欲(感動、自己効力)
- 10 共感性と思いやりの発達
- 11 いのちへの関心・畏敬(死の概念・生命尊重)
- 12 ストレス対処と自己調整、レジリエンス
- 13 思春期・青年期の自己形成と人間関係
- 14 思春期・青年期の自己形成 2：恋愛感情と性的発達
- 15 まとめ：生きる力としての感情／学校の役割と課題

(2) 発表者への支援と授業上の工夫

(詳細は 2018 年度報告書参照) :

A. 発表づくりの準備と支援 受講者が選択したテーマについては、「その日は発表者が授業をする」という認識をもってもらい、筆者は、そのために文献紹介や発表の柱立て等の相談に乗り、同一テーマの過年度のレジュメ(ppt 資料)等を参照させ、発表者の実践経験なども活かせるよう構成を話し合う。

B. 発表への感想・コメントのメール提出

受講者が発表を担当した回については、発表者を含む全受講者が、感想をメールで筆者に提出する。筆者の過去の大学院授業「子どもの意欲と自己の形成」に関する授業研究(平成 26, 27 年度授業評価報告書)から、授業を振り返って感想を記述・提出する作業は、関連する自己の体験や見聞を想起させ、他の授業あるいは地域社会での広義の実践経験とのつながりを実感する機会となることを見出されている。本授業ではそのような「振り返り」作業を促すため、感想作成のガイダンス資料『感想を書くために“振り返る”という作業とは』を配布している。そして、感想・コメントが全員から提出されてから、筆者が感想を一覧形式にまとめ、コメントを付して先に発表者に渡し、次回の授業冒頭に感想・コメントへの回答を行ってもらう。他の受講者も、次回授業開始までに感想一覧を受け取り参照する。本年度は、以上の手順を計 7 回実施した。

3. 授業評価の方法と観点

(1) 「教職大学院生が捉えた実践性と感情発達に関する知識との体験的なつながり」を、授業テーマと自己の体験想起の関連から検討しようと発想したが、前年度同様、受講者は全員ストレートマスターであるため、現職教員としての学校教育実践ではなく、教職大学院生としての連携校実習や教育的活動を中心に、大学時代の実習、ボランティア等の活動を含めて、地域における教育実践的活動を広義に捉えることにした。

昨年度の検討から、想起される「自己(の体験)」とは、「教師役割で児童生徒と関わる自分」に限定されない「多面的な自己」であり、「多様な他者」との関わりの具体的な記憶にもとづく省察ではないかと考えられる。しかし、とりわけ教育実践者としての自己に関

する体験が結びつきやすくなってくることや、実践的状况での体験例を容易に挙げることができれば、そこには、ひとつの専門的熟達化が反映されるとも考えられるのではないか。つまり、教職大学院生としての体験の蓄積と体制化・精緻化の在り方が関わるかもしれない。また、教育活動が埋め込まれた現実の文脈での体験(活動)では、その場で関わる他の実践者から体験談や経験知を聞くことも重要な学びである。また、連携実習校が(その地域性を活かして)継続的に取り組んでいる活動などとのつながりも意識されることがあるだろう。これらの体験事例は、多くはなく、逸話的になるだろうが、そのような「体験」も実践的な学びとして貴重なものである。そのような視野からも、教職大学院生の振り返りを検討してみたい。

(2) 上述のような授業評価・授業研究のねらいについて評価・検討するため、主に期末レポートにおける記述を手がかりにする。

期末レポートの設問は課題 1 から課題 3 までであり、課題 1-1 では、「これまでの体験と授業とのつながり」として、(1)「本授業での学びが実習等での体験理解に役立った例」、(2)「これまでの体験が、この授業での学びに役立った例」、を質問した。また課題 1-2 では、「児童生徒が本授業の内容を学ぶ機会を設けるならどの内容を取り上げたいか」、課題 2 「自分が発表しなかったテーマで重要(興味深い)と思うものから学べることは何か」、課題 3 授業改善のためのアンケート(①本授業の特徴、②自分にとって意味のあったこと、③自分自身の受講の姿勢、④今後改善して欲しいこと)、であった。

評価報告としては、(1)期末レポート課題 3 の、学生による全般的な評価傾向や授業の印象についてまず述べ、授業者としての授業方法などへの省察を述べる。(2)次に、授業開始期における発表テーマ選択の際の、受講者の興味・関心度と、授業終了時点での関心の変化(拡がり)について検討する。これは、本授業で学んだ結果、受講者の関心のレパートリーがどのように拡げられているかを検討する指標であり、基本的な興味の発達・開発のデータである。(3)そして、前期授業終了時点で課した「期末レポート」(記名式、自由記述)での総括的な振り返り質問群への回答を中心的な

手がかりとして、「想起された自己の体験」がいかなる点で授業と結びつけられているかを考え、興味深い想起・体験例を例示する。

4. 期末レポートにみる授業の全体的な印象と評価

＜本授業の特徴＞としては、12名中11名が、「受講者が興味のあるテーマを分担して調べ、授業を(約50分)担当する授業方法」を特徴としている。内容面については、「命への関心」「恋愛」など学校の授業ではあまり取り上げられないが身近なことを学べた、という声もあった。＜自分にとって意味のあったこと＞としては、興味のあることについて調べ深く理解できたこと、受講者にとって意味のあるように責任を持とうとしたこと、など発表に向けて強く動機づけられた面(協同学習的な自覚)が挙げられている。一方、発表者として、「これまでの学校生活を振り返った際に、まわりの友達が虐待を受けていると感じたことはなかった。そのため、虐待は稀なケースなのだろうと感じていた。今回授業に向けて調べていく中で自分のこれまでの考えが誤っていたということに気づくことができた」という振り返り(体験に基づく認識が正しくない場合があるという気づき)なども見られた。

＜今後の改善点＞としては、話し合いによる共有の機会がもっと欲しいという声が複数あった。「振り返り」の提出は、相互開示の機会であると考えていたが、同時性、相互作用性に欠けている面があったかもしれない。

その他、自分が発表者でないときの理解が表面的になりがち、また、一部の発表者が、参考に渡された前年度資料を十分に理解しないまま発表している(ことに受講者が気づいている)、などがあった。

受講生は、授業方法を了解して受講しているが、発表者、フロア、それぞれの理解を保障していき、より興味深く受講できるよう改善したい。また、実践との関連や、有益性について尋ねる質問を設けるなども、授業の目的のため必要だろう。

5. 授業の各テーマへの関心の拡がり

受講者は、開講時に、概説講義を受講後、発表担当を決めるため、興味あるテーマを第1希望から第3希望まで挙げる。各テーマが

得た関心度得点でテーマを絞り、各テーマの第1希望者を原則として発表担当者に選ぶ。この時点では、担当希望の高い順に、「命への関心・畏敬(死の概念)」(13)、「愛着・虐待」(9)と続き、以下同票(8)で、「遊びと想像力・興味」「体験活動と意欲」「共感・思いやり」となった。

授業終盤の期末レポートでは、課題1-2で、児童生徒に学ぶ機会を設けるならどのテーマを取り上げたいか、課題2では、自分が発表しなかったテーマで重要な(興味深い)テーマについて説明を、と尋ねた。この段階では、「ストレス対処・レジリエンス」と「恋愛感情・性的発達」の被選択率が高く、「命への関心・畏敬」がそれに次いだ。

これらの課題1-2および課題2で選択されたテーマが、いずれも発表で担当したテーマと異なる者は、12名中10名(83%)であった。一方、これら2問での選択テーマを、授業当初の関心度調査において希望順位3番までだったテーマ以外から選んだ者は、12名中5名(42%)であった。つまり、受講者らは、自他の発表を通して本授業で学ぶことにより、開講当初より多様な心理学的テーマの興味深さ・重要さに気づくことが出来るようになったが、開講時に既に持っていた原初的な関心との連続性も一方で重視しながら、いわば自己の関心の「核」を拡げよう、豊かにしようとしていたと考えることも出来るだろう。

6. 「子どもの発達と感情」における学びに関わって想起される「自己の体験」の検討：教職大学院生が捉えた実践とのつながり

昨年度の検討では、期末レポートの課題1-1(1)では、「授業での学びが実習校での体験や以前の体験を理解する上で役立ったことはあるか」を問い、一方(2)では、「これまでの体験が、この授業での学びに役立ったことはあるか」を設問して、両者への回答傾向には微妙な相違がうかがえることを1つの興味深い知見として考察した。しかし、言うまでもなく、両者は、広義の「自己の体験」と授業内容のつながりであるから、枠組みと理解されるべき情報という関係性は、逆向きにとらえることができ、往還することによって捉え直し(理解の吟味や、体験の再解釈)も発生する。また、中には、上記の設問の(1)の例とし

て相応しいと思える内容を、(2)で答えているなどの場合もあった。そのため、本稿では、期末レポート課題1-1の(1)と(2)とを峻別はせず、各受講者に複数の回答機会が与えられたものとして、その想起された内容の多様性や意味づけに注目しながら検討した結果を以下述べたい。

(1)概要 12名に、課題1-1(1)(2)の2問が問われたので、述べ24の回答機会があるが、それぞれに複数の体験例を報告した受講者がいる一方、片方にのみ回答した者もあり、計23個の回答を得た。体験理解に関連付けられた授業テーマ別(事例数)は、多い順に、体験活動からの学びと意欲(8)、ストレス対処(4)、愛着と虐待(3)、遊びを通しての想像・興味発達(2)、いのちへの関心・畏敬(2)、メタ認知(2)、共感性・思いやり(1)、恋愛感情と性的発達(1)、計23であった。

(2)想起された事例の属性分類 2018年度報告書で用いた分類観点をを用いて分類を行った。観点1「報告者が事例を体験した文脈」を、①教職大学院等での学校における実習、②学校外での指導・保育支援ボランティア活動等、③教育的立場以外(文脈不特定、私生活を含む)に分けた。その結果、①14(うち教職大学院の連携校実習9、学部の教育実習や院授業等5)、②3(サマースクール1、無人島体験事業2(教委))、③6(高校以前の学校での活動2、私生活4)、となった。①は14例(61%)に及び、いずれも教育実習生という立場が明確な状況での体験を想起し、その事例の中でテーマと一致する体験の主体者(感情を経験している人や体験活動の当事者)はほとんどが、「他者(児童生徒子ども)」であった。②は実習生というよりは、学部時代等の夏休みの一時的体験活動のサポーターとして、他者(児童生徒)の体験を支援した関わりである。そして、③は、自分自身の部活動、性的少数者とされる方々との人間関係、子ども時代の感情経験や体験活動(総合)などであり、私生活や被教育的立場での経験であった。なお、他者(子ども)の心理的経験に着目している想起報告の場合、その相手に関わったり活動に参加する中で、子どもに関する洞察は深まったと読めたが、報告者自身にどのような感情や自己内省が生じたのかについては、必ずしも記載されていない。幼児期の保護者への甘

えや遊びの記憶の場合以外、教育実習の当事者として、あるいは個人的人間関係において、自己についての発見のような気づきの記載は、昨年に続き、少なかった。筆者の指導課題としたい。

(3)考察と特徴的事例の検討 期末レポートでの設問が「実習体験」に言及しているためか、授業テーマの中にもある「体験活動からの学びと意欲」というテーマに関わるような教育実習校での活動が多く想起され、講義で学んだ体験活動の留意点や、現場教師の工夫や効果が、授業で学んだ概念を使って確認される報告が目立った。例えば、視覚障害者と盲導犬に児童が関わる活動の意義づけ指導や、子どもに支援の効力感を実感させるロールプレイの配慮、などを看取っていた。また、サマースクールや無人島体験サポートの報告は、いずれも体験活動が児童の制約や発達課題に及ぼす効果の機微を裏付けていた。さらに、昨年はなかったが、小学校時代の総合学習で、地域の特産物の果物栽培と食育を一貫して体験したことの明瞭な思い出を語る事例もあった。体験活動の事例報告は、今期の授業では、授業で発表される際にも、発表者自身の思い出のスナップを活用したり、連携実習校が継続している地域の歴史資産の清掃活動奉仕など、現職教員ではない受講者が自発的に調べて教材としたことが特筆される。

以上を総じて、本授業での学びとつながる自己の体験として想起される内容は、上記の体験活動以外のものも生徒指導や教育相談、キャリア教育、メンタルヘルスなどにつながり、学生なりの実践の文脈に埋め込まれた記憶であり、地域の学校での実習の中で蓄積されつつある学生の実践知の萌芽ではないかと感じる。その意味で、今後の課題として、受講者がベテラン教員のメンターシップを得て、子どもの情緒発達の実例(実践知)を聞ける機会があればさらに貴重であろう。体験事例には、養育環境に事情を抱える子どもに道德等で親子・家族をテーマとする教材指導に難しさを感じた体験、また、架空の教材でも生死を描いた物語の読解から青年の死の概念を育てられること、一方、被災生徒らへの授業で、死を扱う教材をどうしても学ばせられなかったこと、等を現場で教員が語ってくださったかけがえのない体験が報告されていた。